

講演会「日本版枯れ葉作戦の実相」及び現地調査の報告

鹿児島国際大学経済学部 八木 正

2019年3月15日（金）18時より、鹿児島中央駅前キャンセビル7階よかセンター第1会議室にて、「日本版枯れ葉作戦の実相」と題して講演会を行いました。講師は、『真相 日本の枯葉剤 日米同盟が隠した化学兵器の正体』（五月書房、2013年）の著者の原田和明氏（北九州市立大学国際環境工学部計測分析センター）でした。30名弱の参加でしたが、その内容は、ほとんどの日本人が知らない林野庁の除草剤の扱いの実態や日本とベトナム戦争との深い関連などについて明らかにされ、また質問も多く出て、内容の濃い講演会だったと思います。

その講演の内容を質疑応答の部分も含めて、また手元にある資料なども参考にしつつ報告します。ベトナム戦争時、福岡県大牟田市にあった三井東圧化学では、ダイオキシンを含む除草剤 2,4,5-T（2,4,5-トリクロロフェノキシ酢酸、以下、245T）が製造され、オーストラリアやニュージーランドなどに送られ、さらにはメキシコなどを経て、ベトナムで 2,4-D（2,4-ジクロロフェノキシ酢酸、以下、24D）と混合され、枯葉剤（エージェントオレンジ）としてベトナム戦争で使用されました。エージェントオレンジは表面の帯の色で区別される 15 種ある枯葉剤の一つで、245T と 24D を 1 : 1 で混合したものですが、その生産において、ダウ・ケミカルやモンサントなどのアメリカの化学メーカーがトップとなって、日本も含めた国際カルテルが組織されました。各生産工程・流通過程を細かく分割することで、どこも「枯葉剤をつくった」ということを隠蔽・言い逃れできる仕組みだったわけです。

また、エージェントオレンジは、ゲリラが潜伏するジャングルを枯らすためとか、農産物ができないようにして敵の食料生産に打撃を与えるためとか言われてきましたが、実際には 245T などを生産していたダウ・ケミカル工場などの事故をきっかけに、副産物であるダイオキシンが人体に影響を与えることがわかり、人体にこのダイオキシンを直接浴びせかけることを目的とする化学兵器として使用されました。これより効果的にするために、熱を加えることでダイオキシンが大量に発生することを利用して、ナパーム弾と一緒に枯葉剤をまいたりしたわけですが、ベトナム戦争で使われたナパーム弾もその 93%は日本製だったということです。

三井東圧化学大牟田工業所では、245T を生産する前には 24D を生産しており、一貫して枯葉剤の成分にかかわってきたのですが、そのほかにも様々な薬剤を製造し、その廃水がそのまま川に流され、川は様々な色に染められていたということです。工場労働者は生産過程でその被害に遭いましたが、さらに工場で作られた 245T などが工場近くで廃棄され、大牟田市や久留米市に住む近隣の人たちもその影響を受け、異常出産や中絶なども多かったのですが、そのことは秘密裏にされたのです。

エージェントオレンジがベトナム戦争で使われた時期、三井東圧化学では 245T を大量に増産しましたが、国内でも日本の林野庁ではこの 245T を積極的に除草剤として全国の国有林で使用していきます。1967 年から 1970 年にかけて、245T は粒剤で 4494 トン、乳剤で 109 キロリットル、91 トンが散布され、枯葉剤のもう一方の成分 24D も青森、秋田、岩手、山形の 2620 ヘクタールの山林に 370 トンが散布され、本来害を及ぼしてはいけなはずの杉にまで被害がでました。1970 年には青森県下北半島に生息する北限のニホンザルが南下を始めていることが確認され、奇形児も発見されました。その後モンキーセンターの調査で、ベトナムで問題となっていた枯葉剤を林野庁が生息域周辺で散布していたことが判明、南下の原因は枯葉剤で餌を失ったためと推定されました。

ベトナム戦争の過程で、エージェントオレンジに含まれたダイオキシンが、二重胎児や奇形児などが生まれ、その毒性が知られるようになります。米軍は 1971 年にはエージェントオレンジの使用を中止、これ以降、林野庁は大量に残っていた 245T を除草剤として散布するわ

◆ 除草剤の全国の埋設地

		液体状 (kg)	固形状 (kg)
北海道	夕張市		600
	遠軽町		90
	広尾町※	20	
	音更町	0.5	
	清水町	0.5	
	標茶町		9
	本別町	0.5	
青森県	小泊村		1220
岩手県	山形村		200
	野田村		440
	栗石町		3940
	岩泉町		1095
	川井村		375
	湯田町		20
	会津坂下町		455
福島県	吾妻町		1080
群馬県	昭和村		45
山梨県	甲府市※		30
愛知県	設楽町		1095
	小原村※		150
岐阜県	下呂町		45
	小坂町	2	
広島県	総領町		374
愛媛県	西条市※	108	
	面河村	18	
	津島町	252	
	松野町	72	
	西土佐村※	126	
高知県	窪川町	648	
	本川村	72	840
	大豊町	360	180
	安芸市※	126	
	土佐清水市		-
佐賀県	吉野ヶ里町		945
長崎県	五島市※		116
熊本県	熊本市		1295
	宇土市		2055
	芦北町		180
	玖珠町※	10	
大分県	別府市		75
	日之影町		300
	西都市		2
	宮崎市		990
	同		270
	小林市		120
	同		45
	都城市		86
	串間市	20	
	肝付町		30
鹿児島県	湧水町		1200
	伊佐市		345
	同		375
	南九州市		445
	屋久島町		3825
合計		1835.5	24982

林野庁の資料を基に作成。自治体名は合併前の旧名も含む。※は既に撤去済み

けにもいかず、国有林内に埋設します。

現在も、日本全国の国有林に、粒剤 24982kg、乳剤 1835.5 リットルの 245T が埋設され、九州にも 20 か所に埋設されています。鹿児島県の埋設地は 6 か所で、中でも屋久島には「憩いの森公園」に 3825kg（全国第 2 位）が埋設されています。鹿児島県内では、他に、湧水町 1200kg、伊佐市（2 か所）345kg と 375kg、南九州市 445kg、肝付町 30kg が埋設されています。

林野庁は 245T の廃棄に際し、1971 年 11 月に出した通達では、「水源地や民家、沢筋などから可能な限り離れた峰筋の、なるべく地下水の出ない粘土質の場所で、風水害による崩壊・発掘の恐れがある場所を避けるよう指示」し、「薬剤を埋めた後、覆土を 1m 以上すること、1 か所に埋め込む量は最大 300kg 以下であること、10 倍以上の土と混ぜ、セメント 1、水 0.6、土 4～5 の重量割合で練り合わせ、コンクリート塊として埋め込むこと」が指示されています。しかし、その前の 1971 年 4 月の農林省・農政局長通達では「有機塩素系殺虫剤等の処分について」という文書があり、「やむをえず砂質土壌の場所に埋没する場合は石油かん等に密閉するか厚でのビニール袋につめ、袋の口をよくおりまげて埋没すること」と指示されています。1984 年ごろに四国や北海道で見つかった事例では、灯油缶がそのままの状態で見つかったり、ビニール袋に詰められていたり、まさに農林省の通達に合った処分がされていたのです。林野庁によると、1971 年 11 月の林野庁長官通達で埋設された 245T 剤は 27 トンほどですが、農林省・農政局長によれば、により埋設された 245T 剤を含む塩素系農薬は農水省発表で約 4400 トン、TBS の調査では 13000 トンという報告もある桁違いの量だったようです。

そして、去年の九州北部を襲った豪雨で、佐賀県吉野ヶ里町の 245T 剤埋設地でこの除草剤の周囲への流出が問題となり、新聞やテレビでも取り上げられるようになりました。

そこで今回、講演会と合わせて、3 月 15 日（金）に南九州市埋設地、3 月 16 日（土）には湧水町・伊佐市埋設地の現地調査を行い、どんな状況にあるのかを確認してきました。

まず、3 月 15 日（金）南九州市埋設地調査ですが、計 7 名、車 3 台で行いました。原田氏のほか、NHK のディレクターも東京から駆け付け、同行取材しました。鹿児島中央駅西



西日本新聞 2018 年 08 月 23 日付
<https://www.nishinippon.co.jp/nnp/anaatoku/article/443489/>

口を出発し、川辺の八瀬尾の滝を過ぎた舗装されていない山道を進み、途中迷いつつも、埋設地に到着しました。

埋設地とされる場所は、車 3 台ほどが駐車できるスペースに隣接する約 5m 四方の有刺鉄線に囲まれているところで、「立入禁止」の立札が立っており、そこには「2,4,5-T 除草剤を埋設してありますので、囲い内の立ち入りや土石等の採取をしないで下さい。 鹿児島森林管理署長」と書かれていました。

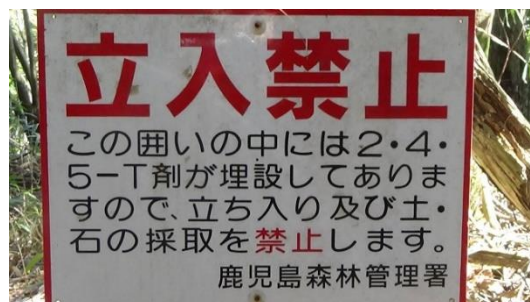


立入禁止の立札の文章は、どこもほぼ同じですが、「埋設」と書かれているところと「埋没」と書かれているところがあります。また、囲い内の木々の樹勢は、その周りのものと明らかに違い、弱々しいもので、245T 除草剤が漏れ出ているとも考えられる場所でした。

原田氏によると、245-T 剤の埋設地の特徴は、軽トラが入れるような道のすぐ近く（長く歩かないといけなところには捨てない）で、もともと駐車場や資材置き場になっていた場所（樹木が生えているのをわざわざ切るようなことをしないでいい場所）に捨てている、一部は除草剤特有のにおいもある、とのことでした。

3 月 16 日（土）には、湧水町と伊佐市（2 か所）に、計 5 名、車 2 台で、調査に入りました。前日の NHK のディレクターだけでなく、朝日新聞の記者も加わりました。まず、湧水町の埋設地に向かいましたが、埋設地とされる場所は、今はほとんど使われていない林道沿いに約 250m も続く有刺鉄線に囲まれていて、森林管理署もこのうちのどこか特定できないとされているところでした。有刺鉄線の一部は真新しいもので、最近補修されたように見えました。また、立札も柄の部分が折れたらしく、囲いの角の部分につけ直されていました。

「立入禁止」の立札には、「この囲いの中には 2・4・5-T 剤が埋設してありますので、立ち入り及び土・石の採取を禁止します。 鹿児島森林管理署」と書かれていました。



有刺鉄線で囲まれた場所には、大きな木が立っているところもあるが、木材などが廃棄されているように見えるところもあり、囲いの少し

外側（林道の反対側）に、バラス（砂利）がかけられていて、そのなかに陶片のようなものが含まれているところもありました。さらに、そこから崖になっていて、その下の谷の部分には沢があり、きれいな水が流れていました。

湧水町の埋設地を後にして、道を下っていくと、日本の名水 100 選にも選ばれた豊富な湧水に恵まれる竹中池があり、公園として、夏場はそうめん流しが営業され、また町営プールがにぎわうところです。本当にきれいな透明感あふれる湧水なのですが、埋設地の山の伏流水や、その近くを流れる沢も、この池に流れ込んでいると思われます。

次に、伊佐市には 245T の埋設地とされる場所が①水俣市との境と②人吉市との境の二か

所ありますが、まずは水俣市との境の埋設地に向かいました。「立入禁止」の立札には、「245-T 剤を埋設してありますので、囲い内の立ち入り及び土石等の採取をしないでください。北薩森林管理署」と書かれていました。

こちらの立札には「埋設」と書かれており、また囲いも有刺鉄線ではなく、トラロープで腰より下の低いところに張っており、容易に入ることができるものでした。

まわりの森林も一面風倒木で刈り取られていて、この一帯が荒れ野のようになっていました。原田氏によると、3年前に来たときは、樹木が生い茂って、それをかき分けて入るのがたいへんなところだったので、今回はここ一帯の全部の樹木を刈り取ってあり、現地の様子は全く変わってしまった、ということでした。



そして、今回の調査の最後の地点である伊佐市と人吉市との境にある場所に向かいました。原田氏は、この地点にも3年前に来たわけですが、高圧線の張られている鉄塔のすぐ下を進むということで、そのあたりを探してみましたが、見つかりません。原田氏が以前来た時には、地元の町議会議員に案内されてきて、その議員は前日にこの地点を実際に確かめてきたのですが、翌日の原田氏を案内した時には迷って、現地につくのにずいぶん時間がかかったという難所で、結局見つかりませんでした。原田氏が、帰ってから確認したところによると、一つ目の高圧線のそばを探したが、そこを通り過ぎて迂回するように道があり、二回目に出会う高圧線のところを入らなければいけないと分かったということでした。とにかく、この地点に行くのは次回の課題ということになりました。

今回の講演会と現地調査を、日本科学者会議の主催ということで行うことができ、大変感謝しております。この講演会と現地調査によって、245T 剤に関してかなりの知見が得られました。同時に、245T 剤埋設地をそのままにしておく危険性と、早急に対策をとる必要性を感じました。また、245T 剤が全国に散布され、また不用意に埋設される過程は、現在の福島原発事故で出た汚染土壌などの取り扱いと共通するものです。日本国民が、今後こうした重大な事実を知らないままではいけないはずです。きちんと事実が解明され、それが全国民の共通認識になっていくよう行動していきたいと思います。今後も調査を続け、状況を確認しつつ、必要な措置を求めることなども行っていきたいと思います。

ありがとうございました。